

ブックショートアワード

12月期応募作品

○ 作品タイトル

『最期の推し活』

○ 著者名

山口 耕平

○ あらすじ（140文字以内）

城南ロジテイクス新入社員の寺本駿介（24）は、職場でのあるささいな出来事をきっかけに、メンタルの不調に陥った。プライドや恥ずかしさなど、いろいろなものが邪魔をして周囲にOSを発することができない中、手を差し伸べてくれたのは、少し不思議な『掃除のおばちゃん』だった。

○ 本編の文字数

20枚 5505文字

へ人物表へ

寺本駿介（24）城南ロジステイク・社員

加藤雄一（45）
〃
・課長

井原洋子（64）海浜クリーン・パート

根岸和代（67）
〃
・
〃

男性社員 1、2、3

女子社員 1、2、3

同期の男 1、2

同期の女

電話相手

○ 工場地帯の道路（朝）

渋滞の中、路線バスがノロノロと進んでいる。

○ 路線バス・中（朝）

混雑する車内の窓際席に座る寺本駿介（24）、虚な目で前を見ている。

その近くに立ち話す男性社員1、2。

男性社員1 「こんなところで渋滞？」

男性社員2 「（スマホを見て）事故っぽい」

男性社員1 「マジか。朝イチ会議なのに」

寺本「……」

○ 工場地帯の道路（朝）

警察が交通規制と事故処理をしている現場の横をノロノロ走る路線バス。

○ 路線バス・中（朝）

男性社員1、2、窓の外を見て

男性社員1 「マイクロバスとトラック？」

男性社員2 「正面衝突？ えぐいな……」

寺本、前を虚な目で見たまま。

寺本（M）「このバスが事故ればよかったのに。それなら……会社に行かなくて済む」

○城南ロジテイクス本社・外観

物流施設の一部にオフィスなども入った真新しい大きな建物。

○同・オフィスエリアの執務空間

一つの大きな空間にたくさんの机や椅子が並び、社員が働いている。

その一角の机に座り、覇気のない感じでパソコン作業をする寺本。

寺本の机や周辺の机の電話が鳴る。

寺本「！」

寺本、体をこわばらせ怯えた目で自席の電話を見つめ、震える手で受話器に手を伸ばし、受話器を掴む。

しかし、受話器を上げられない寺本。

近くに座る女子社員1、自席の電話を取り、全体の呼出音が止む。
寺本、手を戻して深呼吸をする。
近くの席の加藤雄一（45）、その寺本の様子を見ている。

○同・会議室

机に座り話す寺本と加藤。

加藤「最近、仕事に集中できてる？」

寺本「すみません、ちよつと……寝不足で」

加藤「もししんどいなら、少し休むか？」

寺本「！ いや、そんな……大丈夫です」

加藤「評価を気にしてるのかもしれないけど

……そもそもうちの課は出世コースでも

ないし、無理してもしょうがないぞ」

寺本「（悔しそうに）……」

加藤、自分のスマホが振動し、見る。

加藤「あ、ごめん！ ちよつと急ぎの要件だし、続きはまた今度話そう！」

と席を立つ。

寺本「（呆然と）……」

○同・オフィスエリアの執務空間

机で覇気なくパソコン作業する寺本。

電話が鳴り、恐る恐る手を伸ばす。

○（回想）同・同（夜）

寺本、机で電話対応している。

寺本の周り以外は暗く、誰もいない。

寺本「でも、ご案内窓口は19時までなので」

相手「だから！ お前が代わりに対応しろよ」

寺本「何回も言いますけど、私にそんな権限」

相手「（遮り）お前は能無しだってことだな」

寺本「！ 能無し……」

相手「お前どうせ、ろくな大学も出てなくて、

仕事もできねーんだろ。窓際の部署で一

人残業させられてるゴミ野郎だな！」

寺本「（激昂し）お前！ もう一回言ってみ

ろ！ ふざけんなよ！」

相手「……」

寺本「（我に返り、焦って）あ、あの……」

受話器から自分の先ほどの発言「お前！ もう一回言ってみろ！ ふざけんなよ！」の音声。

寺本「！」

相手「城南ロジテイクスの社員、寺本の暴言ってタイトルでSNS上げとくし」

寺本「（焦って）いや、ちよつと」

相手「（遮り）バズるだろうな。それに、こんな言葉遣いするやつ、転職先もないな」
寺本「あの！」

と話そうとするが、ブツッと電話が切れ『ツー、ツー』という音が響く。
電話を持ったまま、顔が真っ青になっ
っていく寺本。

○（回想戻り）同・同

鳴りやんでいる置かれたままの受話器を、真っ青な顔で持つ寺本。

○ 同・廊下

うつむきながら廊下の端を歩く寺本。
寺本（M）「最初は、大丈夫だと思った。ただの脅しだ。すぐに忘れるって」

女子社員 2、3、寺本とすれ違って
から立ち止まって振り返り

女子社員 2 「新入社員、やばそうだね」

女子社員 3 「結構明るくていい子だったのに、突然電話にでなくなったらしいよ」

女子社員 2 「なんかあったか」

女子社員 3 「最近の若い子はよくわからんね」

女子社員 2 「それ言い出したらもう、お局」

女子社員 3 「（女子社員 2 を睨み）……」

うつむきながら歩いている寺本。

寺本（M）「でも、あの電話を忘れられなくて。どんどん不安が大きくなって……仕事も何も手につかなくて」

○（回想）居酒屋・中（夜）

テーブル席で同期の男 1、2 と同期

の女、寺本の4人が飲んでいる。

同期の男1「(寺本に)マジで大丈夫？」

寺本「(元気なく)……なんもねえよ」

同期の女「でも、キャラ変わったよね？」

同期の男2「ま、仕事の悩みは色々あるよな」

同期の女「は？ あんたはなんもないっしょ」

同期の男2「あるって！ 来週の契約ミスっ

たら10億の損失だぜ。マジ焦るわ」

同期の男1「えっ？ 俺、そんなんざらだし」

寺本「！」

○城南ロジテイクス本社・廊下

うつむきながら歩いている寺本。

寺本(M)「こんなの、同期にとったら、大

したことじゃない。だから……そんなカ

ッコ悪いこと、誰にも相談できない」

○同・同・トイレの前

清掃用ワゴンが置かれ『清掃中 足

元にご注意ください』のサイン。

寺本、入っていく。

○同・トイレ

手前に洗面があり、奥に個室と小便器が向かいあう、空間の広いトイレ。清掃員の井原洋子（64）が3つある洗面の1つを、根岸和代（67）が個室の1つを掃除している。

寺本、覇気なく入ってきて、そのまま小便器に向かい用を足す。

洋子、寺本の様子を一度チラリと見てから、清掃作業を続ける。

寺本、用を足し終え、洗面にきて

寺本「（洗面と使おうと洋子に）すみません」

洋子、大袈裟に場所を空け

洋子「どうぞどうぞ、使って！（一つの洗面を指して）こっちの方が綺麗よ！」

寺本「（驚きながら、力無く）あ……いつもありがとうございます」

と言ってから勧められた洗面で手を

洗い、ポケットから出したハンカチで手を拭く。

洋子、その様子をずっと見ている。

寺本、ハンカチを戻し出口に向かう。

洋子、出口に向かう寺本に後ろから

洋子「ねえ、あなた」

寺本、驚いて振り返る。

寺本「！？ 僕ですか」

洋子「そう。あなた」

寺本「はい……」

洋子「最近、元気ないんじゃない？」

寺本「えっ?!」

洋子「なんか、大丈夫かなって」

寺本「(理解しかねて)……」

洋子「あのね」

とゴム手袋を外しポケットからチラシを出し見せる。それは、社内の心の健康相談室の掲示用のチラシ。

洋子「これ、トイレの個室に貼るようになら
れたんだけど……余ったの」

寺本「……」

洋子「あなた、きつと心が疲れてるんだろう
って思ってる」

洋子の持つチラシを呆然と見る寺本。

洋子「（必死に）ねえお願い。ここに電話し
てみて。また元気になって欲しいの」

寺本「どうして……僕に？」

洋子「だって……（照れて）ねえ」

と、個室の方をチラリと見る。

笑顔で和代が2人の方を見ている。

寺本「？」

洋子「私たち、あなたの大ファンなの！」

寺本「！？」

洋子「あなた、いつも私たちに『ありがとう』

って言ってくれてるでしょ。この仕事して
ても、私たち空気みたいなものだし……
お礼なんて言われたことなかったから、
ほんとに嬉しくて。ねえ、根岸さん！」

と、また個室の方をチラリと見る。

和代「（大きく頷き）うん！　そうそう」

寺本「（戸惑って）……」

洋子「だからお願い。必ずここに電話して、
また元気になつて……」

と、チラシを渡してくる。

無言でチラシを受け取る寺本。

洋子、寺本の顔をまじまじと見て

洋子「ねえ……名前を覚えてくれない？」

寺本「！ 僕ですか？」

何度も頷く洋子。

和代も遠くで頷いている。

寺本、首に下げた苗字の名札を見せ

寺本「寺本……寺本駿介です」

洋子「（嬉しそうに）駿介。しゅんくんか。

（しみじみと）いい名前」

和代も嬉しそうに頷いている。

寺本「あの、僕もお名前聞いていいですか？」

洋子「えっ！ だめだめ。そんなの尊みが過

ぎるから……（少し悩み）だめ。私たち

は『掃除のおばちゃん』でいいの、ね」

とまた和代の方を振り返ると、和代

は楽しそうに笑っている。

寺本「……」

洋子、再び寺本をじつと見て

洋子「それよりしゅんくん、約束。必ず電話して。これは私たち掃除のおばちゃんのこと……（寂しげに）最後の推し活だから」

と、そのまま寺本を見続ける。

寺本、何かを言おうとするが、そこに男性社員3が入ってくる。

洋子と和代、何もなかったかのように清掃作業を再開する。

チラシを持って立ちつくす寺本。

男性社員3、不思議そうに寺本を見ながら、小便器へ向かう。

寺本、少し何かを考えてから、トイレから出ていく。

○ 同・廊下

寺本、折ったチラシを手に持ち、不思議そうな表情で歩いている。

○同・オフィスエリアの執務空間

机に座る寺本。こっそりとチラシを開き、電話番号を確認する。

寺本「……」

手を伸ばし、電話の受話器をつかむと、その電話が鳴り出す。

寺本「！」

先ほどと同じように、体が固まり、電話を取れない寺本。

近くに座る女子社員1、自席の電話を取り、呼出音が止む。

寺本、顔が真っ青になっている。

手を元に戻し、引き出しを開いて、チラシを中に投げ込み、閉める。

顔が真っ青なことを誤魔化すように、パソコンのスリープを解除して、メールの画面を開き、受信する。

1通、新しいメール『総務部管財課からのお知らせ』が届いている。

寺本、何気なくメールを開くと、メールの本文が表示される『本日午前、当社の委託先である……』。

寺本「！」

寺本、驚き、画面を凝視したまま、固まり、動けなくなる。

再びかかってきた電話の音に、我に帰ると、廊下の出入口の方を見て立ち上がり、出入口に向かい走り出す。焦り、動揺した様子で、近くの机にぶつかりながら走っていく寺本。周りの社員たち、驚きながら寺本の後ろ姿を見ている。

○同・廊下

寺本、全速力で走っていく。すれ違った社員たちは、驚き、皆振り返っている。

寺本（N）「本日午前、当社の委託先である海浜クリーンのマイクロバスがトラック

と正面衝突し、清掃員の井原洋子様、根岸和代様の2名がお亡くなりになりました。ご両人には、4年以上に渡り本社棟トイレの清掃をご担当いただき、快適な職場づくりに貢献いただいております。ご冥福をお祈りするとともに謹んでお知らせ申し上げます。なお、そのような事情から本日はトイレ清掃が実施されませんので、ご理解をお願いいたします」

○ 同・同・トイレの前

清掃のワゴンも、清掃中のサインも無くなっている。

寺本、走ってきて、中に入っていく。

○ 同・トイレ

寺本、入ってくる。

誰もいないことに気づき立ち止まる。

寺本「！（息が上がり）はあはあ」

動転し、息が上がったまま、奥の個

室まで確認に回るが、誰もいない。

寺本「（息が少しおさまり）いない……」

混乱しながら入口の方に戻ってくる

と、洗面が目に入り、立ち止まる。

水滴ひとつない、綺麗に清掃された

洗面の中央に、花が飾られた小さな

フラワーポッドがあり、メッセーじ

カードが添えられている。

寺本「！」

近づいていき、ゆっくりとメッセー

ジカードを手取る寺本。

『私の推し しゅんくんへ』

元気になってね。本当に大好き。

掃除のおばちゃんより』

寺本「……」

もう一度、トイレの中を見回す寺本。

しかし、やはり誰もいない。

○ 同・同・トイレの前

寺本、フラワーポッドとメッセーじ

カードを丁寧に手に持ち、出てくる。一度立ち止まり、トイレの入口見ながら、また前を向いて去っていく。

○同・廊下

寺本、手にフラワーポッドとメッセーじカードを持ちながら、歩く。すれ違う社員たちはみな不思議そうにフラワーポッドを見ている。

○同・オフィスエリアの執務空間

寺本、入ってきて、手に持っていたフラワーポッドを机に置き、メッセーじカードもそこに添えてから座る。周りの社員、少しの間、不思議そうに見ていたが、皆すぐに仕事に戻る。寺本、じっと花とカードを見ている。

寺本「……」

机上の電話が鳴り出す。

寺本「！」

寺本、恐る恐る手を伸ばすと、そのままガチャリ、と電話をとる。

周囲の社員、その姿に驚いて、手を止めて、寺本の様子を見ている。

寺本「（緊張しながら）はい、城南ロジテイクス、寺本です……はい、請求書の件です。少々お待ちください」

と保留にして、受話器を置く。

近くの席に戻ってきた女性社員1に

寺本「すみません。請求書の件で電話です」
女性社員1「了解です（と電話をとる）」

周囲の社員、安心した表情をして、それぞれの業務を再開する。

寺本、電話を終え、もう一度花とカードを見ると、引き出しを開け、先ほどのチラシを取り出し、開く。

電話に手を伸ばし、受話器をあげ、チラシの番号をプッシュする。

寺本「（電話相手に）あ、すみません。その……相談に行きたいんですが」

○城南ロジテイクス本社・外観（夕）

建物に夕日が当たっている。

○工場地帯の道路（夕）

歩道の端に、献花やお供えのペットボトルがいくつか置かれている。

寺本、花束2つを手に歩いてきて、その前に立ち、献花を見る。

寺本「……」

しゃがみ込んで、花束を静かに置くと、手を合わせ、目を閉じて祈る。

祈りを終え、立ち上がると、空を見上げる。

綺麗な夕焼けが広がっている。

寺本「……」

寺本、しばしそれに見惚れてから、視線を落とし、名残惜しそうに一度花束を見てから、歩道を歩き出す。

歩道を歩いている寺本の横の車道を

車が数台通り過ぎていく。

寺本、10mほど歩くと立ち止まる。

寺本「何かの気配を感じ」……」

背後では、寺本の置いた花束を持った洋子と和代が、献花の横に立ち、寺本の後ろ姿を笑顔で見守っている。

寺本、ゆつくりと振り返る。

しかし、そこに2人の姿は見えず、道に花束が置かれたまま。

寺本「……」

寺本、じっと空間を見ている中で、何かの気配を強く感じ、笑顔になる。

寺本「おばちゃん……ありがとう」

と花束の置かれた方に頭を深く下げながら、ゆつくりと頭を上げる。

寺本「（笑顔で）……」

寺本、振り返り、歩いていく。

その表情は自信を取り戻し、前をしっかりと見ている。

〈完〉